

聖霊降臨主日

「聖霊の示のままに」

民数記9：15-23

へブル12：1-2

(1)

「イースター」から40日後が「昇天日」。それから10日目から旬節「ペンテコステ」・「聖霊降臨」の記念礼拝です。使徒の働き2章1節以下には、主の弟子たち一人一人に聖霊がとどまり、聖霊に満たされ、さらに御霊が語らせるままに主イエスのことを証しはじめたとあります。

「使徒の働き」は、別名「聖霊行伝」とも言われてきました。

その日以来、弟子たちは聖霊に導かれ、御霊に示されるままに宣教を始めました。しかし、時に聖霊に禁じられたこともあったのです。

「それから彼らは、アジヤでみことばを語りめぐりを聖霊によって禁じられたので、ピルピヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった」(使徒16：7)。
聖霊が主権をもってはばみ、お許しにならないかっただけのことです。

エジプトを出た後、神の民イスラエルの荒野における40年の旅もまた、気ままな旅ではありませんでした。

荒野にあっては、「雲の柱」・「火の柱」が幕屋の上の「のほろむ時」、それが朝であらうが、昼であらうが、夜であらうが、「」のサインが

出れば御民イスラエルは急ぎ幕屋をたたんで移動しました。しかし、「雲の柱」・「火の柱」が幕屋の上にとまっつくる間はそれにとままり続けました。(9) (2)

「民数記」は、シナイ半島を巡り歩いたイスラエル民族40年の記録であります。

エジプトを出て、「乳と蜜の流れる地」・「約束の地」「カナンの地」を自指したのですが、直線距離にすれば、わずか200^{km}位に過ぎません。そこを、何と、イスラエルの民は、40年もの間、行きつ戻りつ、シナイ半島を堂々巡りました。ご承知のように、エジプトを出るまで、イスラエルの民は、420年もの間、エジプトの王パロの下に、奴隷の身分でした。奴隷状態から解放されてから、今度は荒野という新しい舞台で主に試みられることになりました。「それはあなたを苦しめ、あなたを試みて、ついに、あなたをさいわいにするため」(申命記8：16)。

「あなたを試みて」とは、訓練、英語の「トレーニング」・「弟子訓練」でもあるです。仮に、荒野を40年の間めへり歩くと仮し、カナンに直行したとすれば、そこには、古くから定住していた11部族がいましたから、彼らとの争いは避けられません。まして、急ぎカナンの地に定住すれば、たちまち異教的習慣に染まってしまう。

「エホバのみを礼拝せよ」と命じられていたイスラエルの民ですから、短期間でこの難しい命題が達成されるとは思われません。

ジョン・バンヤンの「天路歷程」において、クリスチャンさんが天の御国を目指す途上、「落胆の沼」・「死の陰の谷」・「虚栄の町」との様々な試練と出会いながら、御国を目指して旅する姿が描かれています。

讚美歌「主よみもとに近づかん」(讚美歌320)は、御国にまでいたる道がいかにつけてくとも、「なやんで悲しむべき。主よみもとに近づかん」と讚美してきました。

荒野における40年という長期の訓練をイスラエルに与えた主は、何と巧妙な教育者であったことでしょうか。

人間の親は、「早へ目をさせ。出せぬとはれみよ……」・「立ては立て……」といふ具合です。何事にもせつかついです。しかし、イスラエルを導かれたお方は、決して急ぎません。40年という長い年月をかけて御民イスラエルを霊的に訓練されたお方でありませう。

荒野の40年の歩みを振り返りますと、常にイスラエルが神に信頼を置いていたわけではありません。荒野では、「食べるものがないうエジプトにいた時は良かった。」といふお方々もいました。

それを耳にした主なる神は、天から「なす」を降ろしました。しかし、明けても暮れても「なす」は、次第に「なす」は、民はまたつばきを始めます。民はまたつばきを始めた。「なす」は、ただで、魚を食べた。主よみもとに近づかん、主よみもとに近づかん、主よみもとに近づかん。

しかし、主よみもたのほかに食べるものがないうエジプトにいた民のつばきは、「災難」にあって「民数記11:1」といっているのであります。主なる神は、それではと、天から大量のウズラを降ろして、たらふく食べさせましたが、「その肉が彼らの歯の間にあつて食べ尽くさないうちに、主は、民を撃たれた」(11:33)といつてあります。その所の名は、「キフロテ・ハッタワ」(欲心の墓)と呼ばれております。こうして神の民は荒野という舞台において黒々とした汚点を残しております。

(2) 荒野で、パンがない、水がないといつてつばきやイスラエルの民のために「二つの」が与えられました。

一つは、モーセを通して与えられた「十戒」が刻まれていた二枚の石の板。

もう一つは「雲の柱」・「火の柱」です。

荒野を旅するイスラエルを常に「二つの」をもつて導かれたのです。

今朝読んだ民数記9章15節以下の箇所には、「雲が……」とあるだけなのですが、「二つの」は、民数記10章14章22節には「雲の柱」をもちつて導き、夜は、『火の柱』をもちつて彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することできました(22:31-32)とあります。

イスラエルの民は荒野において、進むべきか・とどまるべきか・もどるべきか、それ

とも、右すべきか、左すべきか、迷うこと
とまどうことが多かったと思われます。しか
も、荒野という厳しい環境においては、チヨ
ッとした判断ミスをすれば、たちまち命の危
険と直面します。

「雲の柱」「火の柱」とは、「ナレグイター」
のようでもあります。しかし、「雲の柱・火の
柱」がどのようなものであったかは定かであ
りません。砂漠特有の「竜巻」「トルネード」
と言つ人がおります。しかし、むしろ、聖書
に記されているままに、神ご自身が神の民を
このような不思議なしるしによって、絶えず
荒野の旅を導かれたと受け取ればいいのでは
ないでしょうか。

荒野にあって、雲の柱が幕屋の上から昇り
はじめること、直ぐに御民イスラエルは幕屋を
ただんで前進しました。しかし、「雲の柱」が
幕屋の上にとどまっている間は、そこから動
くことはありませんでした。即ち、40年間、
移動の度に、自らの判断に頼ることがありま
せんでした。

荒野の旅を終え、約束の地に着
き、全ての行程をあらためて振り返るべく、如何
に全ての点におさめて守りわけていたか、ここかも、
そむが最善・最良の導きであったか、気はしめて、
主の御名を崇め、感謝したのがあります。

「雲の柱」「火の柱」の示のままで動いたら
止まらざるゝことが簡単とは思えませぬ。
砂漠という所は、生存するだけでも厳しい場
所です。気温は昼と夜では激変しま

す。日中は45度、夜は2・3度まで急速に
下ります。その温度差は40度近くになりま
す。しかも、女・子供を連れた大集団が荒野
をさまよい歩いているのですから、周辺の種
族・民族に、いつ襲われるかもわかりません。
さらし、早く約束の地に着きたいと思つ焦る
気持ちもあつたはずで。

自分で判断し、動きたくありません。
しかし、彼らはそうはしませんでした。彼ら
は、ひとたび「雲の柱」「火の柱」がのぼれ
ば、直ちに天幕をたたみ、「雲の柱」「火の柱」
がとどまっていれば、そこに何回でもとどま
るのであります。

人生は、「荒野の旅」のようでもあります。
「川の流れのよう」という歌が、一時はや
りました。「知らず知らず歩いて来た細く長
いこの道、振り返れば、遙く遠く故郷が見え
る、こぼれ道や曲がりくねった道、地図さえな
い、それもまた人生、ああ川の流れのよう
にゆるやかにいくつも時代は過ぎ、とどめとな
る人が黄泉に染められた子」。

振り返れば、こぼれ道や曲がりくねった道
である、人生とはいかに自分自身を思つてい
くべきか、

.....
任せを、御心のままに生きることが、
下なですが、御心、御心、折々ながら、
わたしたちの心、

荒野の40年間の全行程を詳しく記録したの
が「申命記」です。8章を見ますと、「人は、

